広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	場面移動と時間との伴い具合 : 四年生の場合
Author(s)	野村, 厚子
Citation	児童の言語生態研究 , 2 : 26 - 28
Issue Date	1968-12-20
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045033
Right	
Relation	

場面移動と時間との伴い具合

――四年生の場合――

野村厚子

「先生、いま、何時？」
「三時十四分」
「え、それじゃあ、保健室から、ちょうど一分で来ちゃった」

分担箇所の掃除を済ませ男子が、教室にとび込んで来て、喜びを満面にたたえた報告なのである。

この子は、自分の足の速さを得意になっているのであろう程度に聞き流していたが、その子とまわりの友だちとの会話によって「ちょうど一分」というところに、何か新発見があるらしいことを知らされたのである。「ちょうど」は「わずかに」の意ではなく、保健室から教室まで「きちんと一分間」ということが、何やらその子の胸をつく何かであったということである。「ちょうど」が「きちんと」であり、「一分」であったために「一分間」の「間（カン）」を思わせたにちがいないと私は判断した。

距離を教え、時間を教えしているわれわれであるのに、その子の今日の発見は、教科を離れた、そして教科以上の哲学的時間のような時間を体感していると思えたのである。

「A君は、保健室から教室まで一分で来られるそうです。いま、A君は保健室にいるとします。はい、それから一分たちました。いま、A君はどこにいるでしょう」

翌朝教室での私の愚問がこれである。私はどこかにあったクイズを思い出しながら、彼らたちに右のとおり尋ねた。

一部では昨日のことも知っているから、わいわいとご多聞にもれない教室風景となる。

B「えっ、わかんないよ」（馬鹿なことを問うなの表情。次の「そうよ」の語がそれを示している）

C「そうよ、便所によっていたのかもしれないよ」

D「第一さ、歩き出していなければ、まだ保健室でうろちょろしているよ」

右の回答で得られたのは、クイズにひっかからないぞの姿勢が強く、それだけに合理的判断的たろうとしているが、結局はそう直観的に思うだけのようで、説明となると、便所によることがまわり道だから時間を多くとり、歩き出さないで、一分経過したとなるとそれは保健室でうろちょろしているとしか考えられなければならないと答えているはずだのに、〃そんなのきまっている〃ことになってしまう。

まわり道したら遠い、近道は早く目的地につけるという生活経験はあっても、遠い近い、早い遅いが、距離・時間に裏打ちされたものになっていないことを知らされたのである。子どもたちが距離を知らないわけではない。また時間を知らないわけでもない。では知らないのは、距離と時間との関係であるか――オリンピック開催中のことでもあり、水泳のタイムなど彼らたちのほとんどがわかっているとしてよい。つまりこの期の子どもたちは、特にあつらえられた距離や時間や、また算数問題における距離と時間の関係ならばわかっている。ところが、現実における生活経験上のそれはその適用を受けずに直観的にわかる成長を遂げているらしい。だから、〃きまっている〃となる。

ところがA君はその直観が、ちょうどという感覚によって、距離と時間とが一つに重なっているということにおいて、その適用を受けたのである。言い換えれば、自分のとりとめない生活の一端においても、距離と時間とが裏打ちされているという発見であったと考えられるのである。

さらに考えねばならぬことは、A君の一分間の「間（かん）」の意識である。時間は「間」として成立しているのか――その「間」は、時計によって習得された一分なら一分の長さとして捉えられているのか、空間移動におきかえられた「間（あいだ）」であるのか――

D君は、「第一さ、歩き出していなければまだ保健室でうろちょろしているよ」と言った。これはクイズに応じるために、また質問が君はどにいますかによって、A君の位置を考えたから、まだ保健室にいるよとの回答となったのであろう。しかし、この回答には空間移動と関係のない時間経過が意識されているとも言ってよい。すなわち、時間は経過であるとする意識である。

この問題に触れる教材を現行教科

書から、求めるのは困難だが、強いて四年教科書（大日本）「いかつり」の部分を借用して、子どもたちにとって時間は、時間経過・推移なのか、あるいは場の移動・二点間の距離に関連するものなのか調べたいと思ったのである。

いかつり

いかつりの漁船は、旗やのぼりをなびかせて、おきへおきへと進んでいく大きな波がどんどんとつき当たる。白いしぶきがたつ。

みんなは、表の甲板に集まった。コックさんが、酒を茶わんについで回った。ぼくにはりんごをくれた。ぼくは、大きなのを二つ食った。とてもうまい。船で食うのはとく別うまい。

もう陸は見えない。かもめが二、三ば水にえさをあさっている。あとや先を、いかつり船がいくそうか走って行く。

「ばんにねむくなるから、昼ねをしとけ。」と父が言った。

「ねむたくない。」

と言うと、父は、

「いいからねろ。」

と言う。しかたなく、せまいコック場の中にはいって横になった。

機械の音で、とてもねむれない。ぼくが、

「いかがつれてくれるとよいなあ。」

と考えていると、おじさんが入ってきて、ぼくのそばにごろりと横になったそのうちに、いつの間にか、ぼくもねむってしまった。

「つり場に来たよ。」

と言うおじさんの声で起こされた。

ぼくが、

「なん時間走ったの。」

と聞いたら、おじさんは

「今、午後六時だから、ちょうど三時間半。」と答えた。

おじさんは甲板に出て行ったので、ぼくもあとから出て行った。

船はまだ走り続けている。

（以下省略）

「船はどんなところにいるの？」

「海の上」

「空の下」

と、まだクイズの続きと思っているらしい。そのうちに

「おき」

「陸は見えない」

と考えはじめた。

「陸が見えないというのは？」

「まわりじゅうが海の水だけ」

ここで、まわり中が海の水だけという状態を全員で確認させた。どちらを向いても同じ海の上なら、どこからどこまで進んだか、わからないということを自覚させたいために。

「船は進んでいるのか、止まっているか？」

この質問はうまくなかった。なぜそんなこを尋ねるのか不思議そうな顔している。

「そんなとき、どんな感じがするかな」

これもうまくないと思ったが、感じを答えさせる方が早いと思ったからであった。

「風が強いから寒い」

やっぱり設問からはずれた。

「いかがたくさんいるのかなあ。」

これも漁師の気持ちを言えばいいと思ったのかもしれないから否定できない。

「カモメがとんでいるんだから、そうとう沖だな。」

の声。教科書の中での文章上から考えたらしい。

「なんで、リンゴがうまいのかなあ。」

私の設問の意図には答えそうもない。私のほうがジリジリして来て、

「まわりがそういう様子のとき、船に乗っていて、どんな気持ちなのだろうか。」

と念を押して了った。

「気持ち悪い。」

「波が荒いから、酔ってしまう。」

「まわり中が海だけだから、目がまわってしまう。」

「そうよ。目がくらむんだ。」

そこで、もう少し、私の設問に近づけたいために、海の上の船と同じような場面を設定してみた。

「家へ帰るとき、どんなに歩いても、いつも同じけしきだったとしたら、どんな気持ちだろうか。」

この苦心も子どもたちはわかってくれないらしい。

「変なの」

という声しきり。

突然、やや愁眉を開いた回答が出た。

「それじゃあ、まるで、さばくの中をひとりで歩いているみたいだな。まわり中がすなだけで、どっちがどっちだかわかんない。」

「そんなところを歩いていれば、どこか同じところを行ったり来たりしているみたいだな。」

「ぐるぐるまわっているみたいなんだよ」

「それじゃあ、進んでないみたいに思えるね」

と。

ついに、待っていた回答に近くなる。

そこで、

「進んでないみたい、というけれど、ほんとうは船は進んでいないのか？」

進んでいると答えるもの圧倒的多数。

「それでは、そういう海の上では、はっきり進んでいると、何によってわかるのだろうか？」

この問にすべてを託す気持ちになる。

「最初は、陸が見えていたのに、だんだん見えなくなったのだから。」

「陸が見えなくなってからのことがよね、先生。」

「スピードメーターを見ればわかる。」

「エンジンの音が聞こえる。」

どんどん考えられるだけ続けさせてみる。

「無線を使ってやる。無線は聞こえる範囲があるから、それが聞こえなくなれば、陸から何キロ以上かわかる。」

「ロープを陸を結んでおいて、船にずっとつないでおくとロープが長くなるからわかる。」

「そんな長いロープはないよ。」

「そういうこともあるので、沖へ行ってから、ロープでゆわえたドラムかんを放りこんで、そのロープをつなげていく。」

という想像豊かな修正案も出てくる。もちろん

「そのドラムかんが動いた困る。」という意見もすぐ出て論戦となる。

「それじゃあ、そのドラムかんに、船のいかりをくっつけて動かないようにする。」

「船がとまる時困るよ。」

「燃料がなくなれば自然にとまってしまうからいいよ。」

など、奇策や珍案も出ながら、話がはずむ。

「太陽が動く」

「でもくもりの日もあるよ。」

「時計ではかればいいよ」

「じゃあ、時計がとまっていたらどうする。」

「それにしても、時計は、船がとまっていたって、進んでいくよ。」

右の終わりの回答によって、時計と別に時間を考えることができているとして誤りではあるまい。右の終わり二回答とも、時計ということばを用いて述べているけれども、時計から離れたところでも、時間経過を意識しているための表現である。船の進行に伴う時間経過ではなくて、時間経過そのものが気になるから、時計がとまっていたらどうすると言っており、最後の回答は、船はとまっていてもと言うのだから、明らかに進行と無関係に、時間経過に伴う時計の針の進みを考えているとしてやってよい。

右の回答を、他と区別したのは、それまでの回答が、ロープを用いたり、燃料が減っていくなどと答えて、やはり経過を言い表わしているものの、経過を表わすために、目で確かめられるものがあげられているのに比べると、終わり二回答は、経過を観念的に捉えられはじめたとしてよいと思ったからである。

しかし、これ以上に子どの自由な発言は発展はもとより続くこともしなかった。

いかつり船が三時間半走ったのはわかるのである。針が六時を指しているから時間が経ったとする。そして船は、先に陸が見えていたところを走っていたが三時間半経ったので沖に来ていることもわかる。思い返してわるのである。時間はふり返ったときに発見される。しかし、船が進んでいるかいないかわからない状態で目的地に目指している時、すなわち、現在進行の状態時におけるときの流れを意識する子は少なく、明確に概念化することは困難な段階である。

ただ付記したいことは、私の力不足から授業とも調査ともつかない教室風景と、ならざるを得なかったのに、子どもたちは、「先生、きょうみたいな国語の時間またやってよ」とせがむ子が多かったのはどうしてであろう。自分たちにとって不可解とするところに当面する何かを感じていたとしては、あまりにひとり合点な解釈であろうか。

（青梅第一小学校教諭）

今夏合宿研修の報告

本会主催、第一回関東支部研究集会は、八月十六日～十八日の間、伊豆子浦で開かれた。

参加者氏名（二十四名）

相川真理　綾井洋子
飯島千鶴子　飯住良夫
石井邦男　市川孝夫
岩倉倶子　上原輝男
葛西琢也　小山和子
椎名伸子　島崎時子
鈴木忠彦　鈴木ノリ子
関山邦宏　高橋洋子
田村ふさ子　丹野しげ子
額賀淳子　野中知子
野村厚子　松原俊一
宮本正樹　藤村雄一

研究活動の内容と目的

◈教科書教材（光村図書出版・一～六年）を対象に、予期される児童の言語生態要因の分析と抽出を行なった。

◈言語生態要因の学年相当段階、並びに言語生態要因の相互関係を求めた。